

トルコ南東部地震被災者支援  
ハタイ県の被災した子どもを対象にした  
教育支援事業 報告書

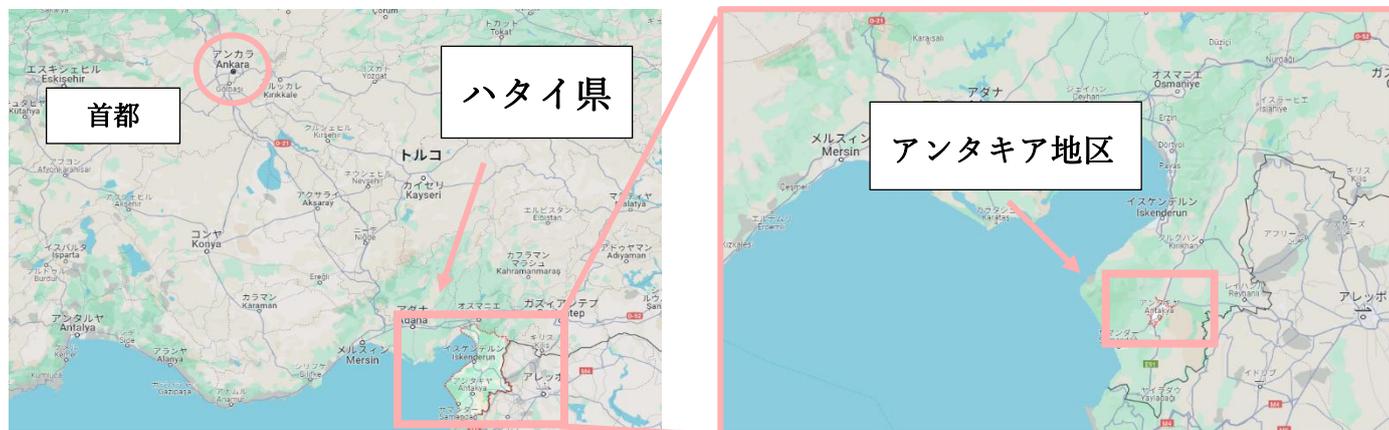


シャンティ国際ボランティア会  
Shanti Volunteer Assoc.



## II 活動地の概況

### 【トルコでの活動地】



### 発災からの状況推移

2023年2月6日、トルコ南東部を震源とした大地震が発生しました（ガジアンテップ県でマグニチュード7.8の発生後に、カフラマンマラシュ県でマグニチュード7.6が発生）。地震直後に建物が倒壊し、また火災の発生・交通網の断絶したことにより、トルコで5万人以上が死亡、10.7万人以上が負傷する大惨事となりました。

シャンティは、復旧・復興段階を迎えた2023年6月、職員を被災地域に派遣して、現地の状況を調査いたしました。市街地では、被災者が地震直後に暮らしていたテントから簡易住居（コンテナ）への移住の促進、損壊建物の取り壊し、コンテナを用いた経済活動の段階的再開、損壊を受けていない校舎での公教育活動の再開などが見られました。ただし郊外では、コンテナだけでなくテントが立ち並ぶ避難区域も、点在している状況でした。

2024年2月には、地震が発生してから1年を迎えました。被災地域のインフラも復旧が進んでいます。発生直後には多く見られたテントの数は目立って少なくなり、コンテナ型の避難区域も徐々に規模を縮小しています。しかし被害が大きかった地域（ハタイ県やアディヤマン県など）では、生活基盤の復旧や瓦礫の撤去が依然として課題であることも事実です。さらに、物理的な復旧の陰で、被災地の今後に大きく影を落としているのが、子どもたちの教育への悪影響です。

地震による校舎の損壊、通学バスや道路の破壊、教師の被災、学用品の不足、トラウマなどによって、400万人の子どもが、短くて数カ月、長くて現在に至るまで、教育機会を奪われたと推定されています。さらに地震によって、子どもの通学を阻む、金銭的・制度的・言語文化的な障害が、悪化した点も懸念されています。シリアを主とした隣国の避難生活中に被災した子どもは、35万人と推定されています。長期の教育機会の喪失は、それ自体がまた、子どもの復学を阻む要因になることが懸念されます。

地震から2か月が経過した2023年4月辺りから、徐々に公立学校は再開を始めました。

しかし、開始時期を地震が直撃した学年後期を、ほとんど学校に行けずに避難生活を過ごした子どもたちも多くいます。国連をはじめとする国際人道支援機関は、被災地域の教育課題として、公教育用の校舎ならびに民間校舎の建築・復旧、教育物資の提供、キャッチアップ学習の促進、教師への心理社会的支援の講習を掲げています。これらの方針を参考にして、シャンティは、ご支援者の皆様から頂いた寄付金と公的資金を活用し、被災地域に暮らす子どもの教育支援事業を実施しています。

### Ⅲ これまでの活動内容

#### ① 緊急の食糧配布

地震が発生した直後のトルコに、日本から支援物資を送ることは困難と判断しました。そこで、4月にお預かりしました皆様からのご寄付をもとに、現地で被災者支援を行う提携団体(YEÇED)にお見舞金を送りました。YEÇED が、お見舞金を用いて配布食糧セットを購入し、被災された350世帯、約1750人に1か月分の食糧を配布することができました。

(配布食糧セット) 米・レンズ豆・小麦粉・パスタ・砂糖・塩・茶・オリーブ・ジャム



食糧セットの配布模様①



食糧セットの配布模様②

#### ② 初動調査

発災から約4か月が経過した6月、YEÇEDとの調整の元、弊社3名の職員を被災地域に派遣し、現地の状況視察と今後の事業の策定のために、初動調査を実施いたしました。震源地であるカフラマンマラシュ市を中心に、現地の被災状況を視察いたしました。またYEÇEDの事業対象地を中心に、被災者が居住する避難区域を訪問し、被災者の住宅環境やニーズの調査を行いました。さらに他の支援団体も訪問し、支援および調整状況について把握いたしました。



取り壊される被災建物



提携団体のテントで勉強する子どもたち

## IV 現在実施中の活動

初動調査の結果から、地震から数か月が経過した当時であっても、特に教育機会への子どものアクセスが回復していない状況に目を向けるべきだと判断しました。そこで、外務省（ジャパン・プラットフォーム）の資金と、皆さまのご寄付を活用する形で、被災した子どもの教育機会を改善する事業を2023年10月から実施してきました。

### ① 学習スペースを整備する活動

#### ● 概要

被災した子どもたちは、教育施設の倒壊や破損により学習環境の確保が困難となりました。彼らの学習の遅れも懸念されています。そこでYEÇEDと共に、地震で大きな被害を受けたハタイ県アンタキア地区の避難区域にて、学習スペースの運営と補習コースを開始しました。

この活動は、被災した子どもの教育機会を補填し、学習を再開・継続できる環境を整備することを目指しています。学習スペースとして、常時解放型のコンテナを設置し、授業のない時間帯や、放課後に就学中の子どもが自由に利用できるようにしています。また補習コースでは、常駐するボランティアが子どもたちの授業に対する理解度を確認、宿題へアドバイスすることで、学習の遅れを取り戻せるようサポートしています。

#### ● 参加者

本事業はアンタキア地区の避難区域に住む学齢期の子どもを対象としています。被災地域には、トルコ語話者のみならず、クルド語話者や、地震以前に隣国であるシリアから逃れたアラビア語話者が多く住んでいます。話す言葉に関わらず学習スペースにアクセスできるよう、クルド語・アラビア語でのコミュニケーションが可能な職員・ボランティアを配置しています。



- 方法

コンテナ型の学習スペースを、9時から18時までオープンしています。学習スペースは、最大15人の子どもが同時に利用できます。避難区域には、学校に通うことができていない子どもがいます。またトルコ政府が採用する学校二部制により、学校に通っている子どもも、特定の時間帯には避難区域に留まっています。授業のない時間帯や放課後、また自由な時間に、子どもたちが学習スペースを利用しています。

学習スペースには常駐の職員とボランティアが、最低2人は駐在し、子どもの学習を見守りつつ、宿題や学習方法に関する質問に答えています。時間を区切って、科学(Science)、技術(Technology)、工学(Engineering)、数学(Mathematics)の4つの教育分野に特化したSTEM教育などの、学習ワークショップも実施しています。スタッフの多くは教育や心理学の専門的な知識・経験を持っています。ボランティアも、定員を超える応募から適任と判断された方が、指導・講習を受けて従事しています。特に被災地域に住むボランティアの方が、中心となって運営できるように工夫しています。

時間	開催内容
9:00-10:00	自由学習時間
10:00-12:00	ワークショップ（低学年向け）
12:00-14:00	自由学習時間
14:00-16:00	ワークショップ（高学年向け）
16:00-18:00	補習コースの開催

学習スペースのスケジュール例

- パートナーの声

**プロジェクト・コーディネーター Merve Özenler さん**

2月6日の地震ではハタイ県の半分が破壊され、残りの半分も深刻な被害を受けました。子どもたちの教育と福祉を支援する団体 (YEÇED) として、このような危機の直後に、子どもたちの教育を受ける権利と心理的な教育支援を確保することは非常に重要なことでした。しかし、緊急時に教育分野で活動する団体は、トルコにほとんどありません。私たちがシャンティとドナーからの支援を受けて立ち上げたプロジェクトを通じて、何百人もの子どもたちが地震の影響を軽減することができました。地震大国という境遇を共にする日本とトルコが行うこのプロジェクトは、両国の連携を強めるものだと感じています。

- 成果・進捗

放課後16時~17時半に実施される補習コースには、様々な学年の子どもたちが宿題を持って集まります。子どもたちは定期的に宿題に取り組む時間を確保できることで、学習の

遅れを取り戻すことができます。またわからない問題がある時は、常駐しているスタッフが子どもたちの学習をサポートしてくれるので、子どもたちの学習意欲が以前より高まっていると聞いています。

11月には、リサイクルの重要性を説明するため、リサイクル素材を用いて、子どもたちの想像力を活かした工作ワークショップを開催しました。子どもたちは、卵パックやペットボトルのキャップ、トイレトペーパーなどから、鉛筆立てや花瓶、植木鉢を作りました。ある生徒は、家で食べたピーナッツの殻を集めて持参し、「先生、これもリサイクルできますか?」と嬉しそうに聞いていました。子どもたちの行動から、物をすぐに捨てるのではなく、「無駄にしない」という意識を学んでいる姿が感じられました。



工作ワークショップの様子



宇宙に関するワークショップ

#### ● 参加者の声

放課後の補習コースに通う子どもがいる保護者からは、子どもの学習環境が整ったことや、スタッフのサポート体制が手厚いことに安心しているという、感想を頂いています。子どもたちからは、宿題が出ていないときでも活動に参加したいので、スタッフから課題を出してほしいというリクエストや、次の補習コースはいつになるのかという質問が多く届けています。STEMワークショップにも、子どもたちの多くの興味が寄せられています。開催するたびに次回も開催して欲しいという声が多いことは、スタッフが継続してワークショップを企画・開催する、大きなモチベーションになっています。

#### ● 今後

補修コースの成果を測るために、事業終了前に、子どもたちの学習理解度の改善についてモニタリングする予定です。またSTEMワークショップでは、引き続きYECEDの開発チームと教育チームがコンテンツを検討し、発展させていきます。子どもたちの興味を引き、より多くの体験学習を盛り込んだワークショップを企画していく予定です。

## ② 学習へのハードルを小さくする活動

### ● 概要

被災した子どもたちが、長引く避難生活で蓄積したストレスのために、学校に行けなくなり、また勉強に集中できなくなった点が懸念されています。そこで YEÇED と共に、ハタイ県アンタキア地区の避難区域とその周辺地域で、ストレスマネジメントのためのグループセラピーと、学校に通えていない懸念がある子どもの訪問・学習に関する相談を開始しました。

この活動は、被災した子どもが、より意欲的に学習に取り組み、また学校に通うことができるようになることを目指しています。各子ども・家庭が抱える、学習・就学へのハードルとなる状況に対して、ストレスマネジメント、学習相談や制度の紹介、他の機関への斡旋などを通じて、ハードルが小さくなるようにサポートしています。

### ● 参加者

アンタキア地区で、避難区域内外に住む学齢期の子どもとその保護者を対象としています。特に避難区域の外での活動では、学校に通えていない懸念が大きいことから、シリアから逃れた子どもの家庭を中心に訪問しています。

### ● 方法

スクールカウンセラーが、被災した子どもの相談時の様子などから、子どもたちが興味を持つようなセラピー内容を決定します。悲しみや怒りといった感情との向き合い方や、地震の経験を自分の中で生きるエネルギーに変える方法などを、身体を使って学びます。またグループセラピーの一環として、一日を通したイベントを開催しています。同世代の子どもたちで、手芸ワークショップや頭脳ゲームなどに参加し、正直さ・責任感・共感力といった社会性を育むきっかけを提供しています。

またスクールソーシャルワーカー\*が中心となって、親を亡くした子ども、母子家庭で暮らす子どもを中心に、学習や就学に問題を抱える子どもを訪問します。彼らの話を傾聴し、学習環境面と心理面の観点から、より意欲的に学習に取り組めるようサポートしています。また子どもの保護者が子どもの就学に消極的だと判断した場合、保護者の価値観を重視しながらも、就学に向けた建設的な提案を心掛けています。

\*スクールソーシャルワーカー：教育分野に関する知識に加えて、社会福祉に関する専門的な知識や技術を有する。問題を抱えた子どもに対して、置かれた環境への働き掛けや関係機関等とのネットワークを活用するなど、多様な支援方法を用いて課題解決への対応を図る。



身体を使ったグループセラピーの様子



イベントの様子①

- パートナーの声

スクールソーシャルワーカー **Fatma Öztürk** さん

私はハタイ県出身で、地震の前はハタイ県に暮らす避難民への人道支援に関わっていました。しかし地震が起きて、仕事も親戚も夢も一度に失いました。それから別団体でボランティアとして働いていました。YEÇEDの仕事に応募してからは、自分とハタイ県の人々のために一生懸命働いています。自分と同じく、ハタイ県のために働きたいと思っていた友人たちも一緒に働いています。働き手が増えて、以前よりスピード感を持って仕事に取り組んでいます。また私はアラビア語も話せるため、トルコとは異なる文化圏出身の被災者を含めた、多くの方々とコミュニケーションを取り、活動を広めることができている。今の目標は、1年以内にハタイで困っているすべての家庭を訪問し、学校に通っていない子どもたちの就学を支援することです。



Öztürk さんが家庭を訪問する様子

### ● 成果・進捗

グループセラピーでは、避難区域の中だけではなく、車を運転して離れた場所にある学校へ出張セッションを開催しています。「教師の日」(11月24日)に合わせて開催したイベントでは、被災地域の学校で奮闘する先生の方もお招きして、YEÇEDと子どもたちからの感謝状を贈呈しました。他にも、子どもたちが、自分たちの権利について広く学ぶイベントも開催されました。

またスクールソーシャルワーカーが個別に訪問し、学校に通っていない懸念がある子ども、約130人の就学状況をチェックしています。約3割の子どもが学校に通えていないと報告されています。その理由も、保護者の方の学校制度に対する誤解、通学バスがないこと、子どもが抱える身体的・心理的障がいなど、多岐に渡ります。個別事情に鑑みながら、子どもが学校に通えるためのオプションを保護者と相談しています。

### ● 参加者の声

子どもたちから、グループセッションを通して、怒りの感情を周囲にぶつけるのではなく、向き合う重要性に気づいたという感想を聞いています。また感情の高ぶりを抑える呼吸法など、日常的に使えるスキルを身に着けることができたという感想も頂いています。イベントでは、世界の他の地域で発生する出来事を学ぶことで、自分たちに何ができるか、子どもたちの間で話すきっかけになったとの声を頂いています。

### ● 今後

グループセッションに参加する子どもたちに対して、事前と事後(約6週間後)に学習意欲やストレス状態に関して質問することで、セッションの効果をモニタリングする予定です。また様々な理由で就学していない子どもとその保護者に対して、スクールソーシャルワーカーとスクールカウンセラーが常に連絡を取り合い、家庭や子どもたちの状況に適した教育モデルを提案・指導していきます。並行して、子どもたちの就学状況、保護者の就学への積極性の変化を、事業期間終了時に確認する予定です。



——地震から1年を迎えて——

地震発生から1年となる2月に行われたグループセラピーの内容を紹介します。

地震についての理解を深める絵本『大嵐』、災害への対処法を伝える絵本『亀』の読み聞かせを行いました。読み聞かせの後、「6分割物語構成法」に則って、子どもたちに絵を描いてもらいました。セラピストの指示に従って子どもたちは、各場面に「主人公」「課題」「援助者や援助ツール」「困っている状況」「解決方法」「結末」の6つを描きます。作り出した物語と現実に関わった自分の物語を対比・投影させることで、ストレスへの対処法を見つけるきっかけを作るセラピーです。

子どもたちは、自分たちが経験した「地震」という困難な出来事をどのように対処したのか、絵本に登場する強い主人公に置き換えて語る時間を持ちました。



読み聞かせの様子



子どもたちが描いた絵